飛天双〇能

〔ひてんふたわのう〕

第四回

令和8年4月8日(土)

午前8時始

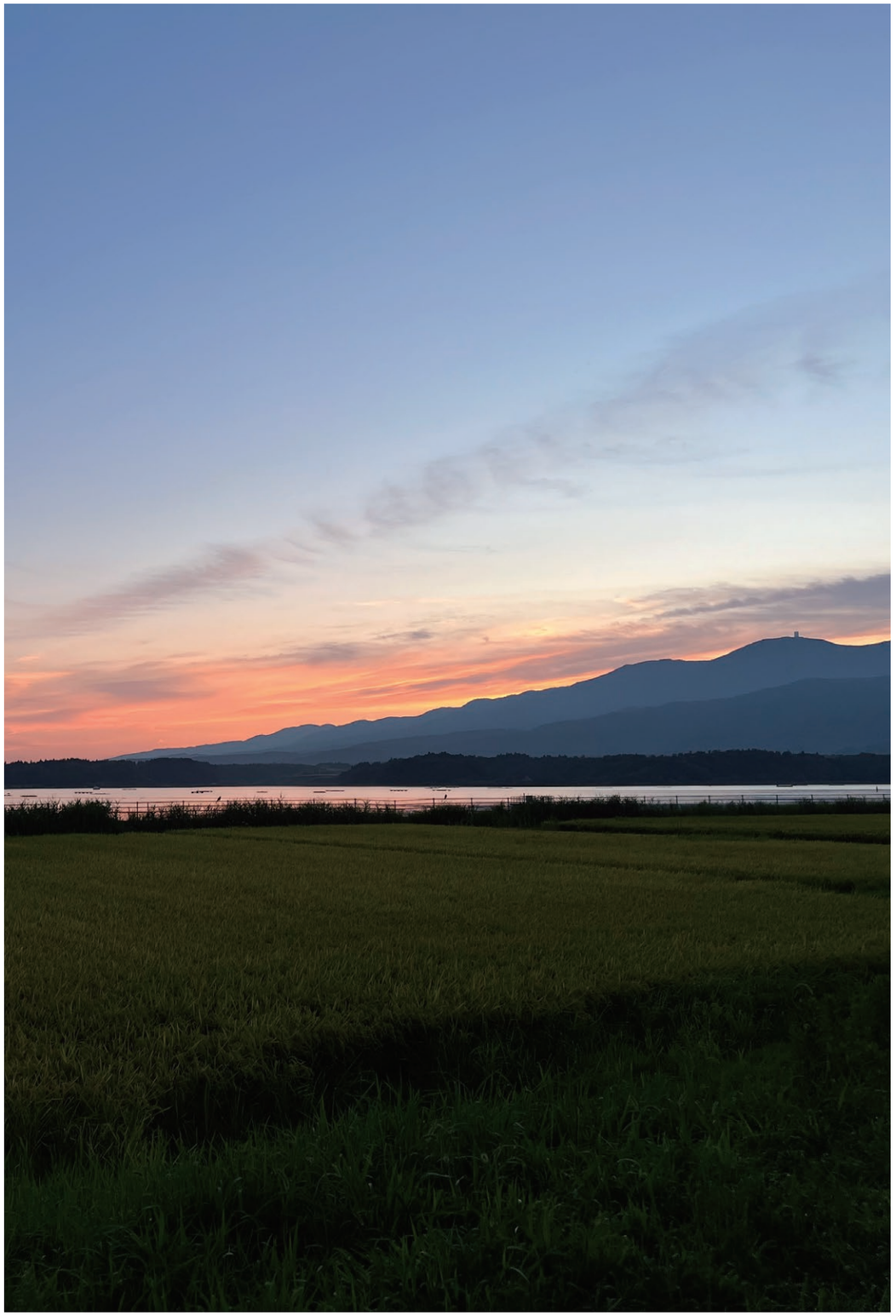
佐渡島内 複数箇所

hitenfutawanoh.jp

農と能

人々がお能と向き合ってきた永い歴史のひとつとして、江戸時代以降の佐渡島はお能が庶民に広がりを持ったということなのである。島人の内に秘めたる好奇心の強みであろうか。田畑を耕しながら物語の情景を描写し、土の上から自然に感謝し、素謡にして感性を深めた。こうして人々の生活に入り込み島の文化となっていった。かけ離れているようで実は密接に繋がる「農」と「能」。佐渡の雄大な田園を眺めていると、お能が広まった理由がやんわりとわかる気がしてくる。きっと未来人も佐渡のお能を必要としているに違いない。

飛天双〇能、佐渡



飛天双〇能 佐渡

花まつりに開催される「飛天双〇能 佐渡」主催代表としてご挨拶申し上げます。

「飛天双〇能 佐渡」開催準備の為に、この1年以上にわたり佐渡へと通い続けて参りました。その中で数々の出会い御縁をいただき佐渡の方々より心温まるお力添えを頂き、今回喜びと共に開催することと成りましたこと誠に有り難く心より御礼申し上げます。

佐渡は申すまでもなく「能の島」と呼ばれ、島中に在る能舞台において佐渡に暮らす方々による能が日々の暮らしに根付く生活文化として継承されております。

能は本来同じ発声の農と同じ意味として能力や能うなど、ものを産み出す力を表しております。農業の農は衣食住全ての、もの作りに関わることを表す故に「お百姓さん」と言われます。農と能」との関わりは切り離す事の出来ない唯一無二の関係です。

農で産み出された衣食住全てに亘るもの作りの成果を披露し神仏祖先に捧げる「まつりごと」の場が「能楽」の役割になります。佐渡の風土が育んだ衣食住の産物縁の品々を身に付け手にとって謡、舞、囃すことで、佐渡の風土と人々がひとつに調和することになる「まつり」つまり間が釣り合うことになるのです。

佐渡の姿は25年先の日本の未来の姿を現すと言われる日本の縮図です。伝統文化継承、少子高齢化や食料自給率低下、医療問題など様々な社会問題は我々現代に生きる者にとりましても切実な問題ですが、翻ってこの佐渡が率先して様々な課題を克服し素晴らしい日本の姿を表せば、これから先の輝かしい未来の雛形になります。

この度の「飛天双〇能 佐渡」は今なお現存する能舞台を可能な限り巡り、嘗て島中が能に満たされていた佳き時代を思い出して頂き、伝統文化継承への励みになる一助となれば幸いです。

今回の御縁を大切に毎年継続し関わりを保つ事で、25年先の日本の姿が素晴らしいものになる事を信じて佐渡と共にこれから先も歩んで行く覚悟です。皆様方にとりまして能楽と言うものの本質を見直す機会になれば幸いです。

佐渡との「まつりあい」が出来ますことに感謝し御礼申し上げご挨拶とさせて頂きます。

彌榮　大倉正之助

飛天双〇能の奉納に際して
―古代・中世の神宮式年遷宮概説―

神宮参事／広報室次長　音羽　悟

令和8年2月8日㈰、内宮二部当直（宿衛長）に入る前に、大倉正之助さんからケイタイに電話が入りました。春分の日の内宮参集殿能舞台での奉納と4月5日㈰から8日㈬まで佐渡島で開催される飛天双〇能へのお誘いでありました。前者については、ご挨拶とご対応させていただけますが、後者に関しては、関西方面の方々の神宮研修会と愛知県神社庁教化研修会とが目地を押しで4月上旬の日程が重なり、佐渡島には残念ながら行けませんとお伝え申し上げると、ご挨拶分だけでも頂戴できないかと依頼されましたので、茲にしたためます。

多賀大社から始まった飛天双〇能の奉納は、2回目が伊勢の神宮、昨年が鞆の浦で、今回が佐渡島と4回目を迎えましたことを心からお祝い申し上げます。第63回神宮式年遷宮の諸祭・諸行事が順調に執り行われていることから、大倉さんには、「遷宮のことを紹介いただけたら幸いです」とお願いされましたので、以下神宮式年遷宮の総説として、古代・中世の概略について、かなり長くなりますが以下、解説致します。なお、近代・近世の概略については、考を改め、来年の挨拶で紹介させていただきますので、お含み置きの程、お願い申し上げます。

神宮の式年遷宮とは、20年に一度、をはじめ諸殿舎・神宝に至るまですべてを新たに造り替え、大御神にお遷りいただく祭りをいいます。式年とは「定められた年」という意味で、延暦23年（８０４）に撰述された『』に「常に二十箇年を限りて一度、に遷し奉る」とあり、20年に一度という式年の根拠が示されています。さらに延喜5年（９０５）に編纂がはじめられ延長5年（９２７）に成立した、古代法典『』によれば、国家の威信をかけて皇大神宮正殿・・及びを20年に一度新造し、（豊受大神宮）・別宮等もこれに倣い、宮地は二所を定めて交互に遷座する旨がはっきりと記されています。

また古く後醍醐天皇の元亨3年（１３２３）内宮第34回遷宮（式年遷宮を古くは正遷宮と称す）までは「式月式日」と申し上げ、遷宮を行う月日が定まっていました。内宮は旧暦9月16日、外宮は2年後の9月15日といずれもの日に行われるのを通例とし、大御神に瑞々しくなった新殿へお遷りいただいた後に、新穀をたてまつるのが本来の姿でありました。式年遷宮が神嘗祭と不可分の性格をもつ祭りであることから「大神嘗祭」とも称される由縁であります。

式年遷宮の初見は、内宮禰宜家に代々伝えられた古い記録文と日記をもとに神主とその子孫たちが編纂した『』（平安後期成立）にみられます。それによると、天武天皇の朱雀3年9月20日の条に、20年一度の遷宮は「立てて長き例と為すなり」とあり、持統天皇即位4年（６９０）に内宮、同六年外宮において、始めて遷御が斎行されたと記されています。この朱雀という年号は私年号のため、史実に照らせば天武天皇の御代には当てはまらず、式年遷宮が制度化されたのは、持統天皇の御代に至ってのことと有力視されますが、「天武天皇の御宿願によるもの」との学説が定着しています。

なお、立制以前の造営については、同書に「朱雀（朱鳥）三年以往の例は二所太神宮の殿舎、御門、御垣等は宮司が破損の時を相待ち、修補し奉る例なり」とあるように、著しい破損により尊厳を護持しがたいとき、宮司がこれを修補していたことがわかります。

20年を式年とすることについて、平安・鎌倉時代は前遷宮から数えて20年目（実年数は19年であるが、旧暦での換算は19年7閏となる）、遷御は式月式日に行われるのが常でありました。ところが後村上天皇の第３５回内宮正遷宮は先例より1年遅れて21年目（実年数20年）に行われました。以後年数も一定せず、ついに南北朝時代の戦乱の世では正遷宮が遅延する擁怠期を迎えました。室町初期に一度安定期を迎えますが、寛正3年（１４６２）の第40回内宮正遷宮斎行を以て中絶し、修理を重ねてその危機を凌いだ時期もありました。

平安から鎌倉に至る15ヶ度の遷宮記録より例証を抄出した『遷宮』（１３６２）に「皇家第一の重事、神宮無双の大営也」と称せられるように、立制以来国家の公的制度の下に位置づけられ、斎行については時の国家、行政機関が天皇の命を受けて責任をもって行うことを原則としてきました。『皇太神宮儀式帳』には、京都からという監督権を持つ官吏が木工48人を率いて赴任し、伊勢・美濃・尾張・三河・遠江の5ヶ国から国ごとに国司・郡司が役夫を率いて従事することが定められています。やや下って『延喜大神宮式』には造宮使に対する給付や工匠・役夫に対する糧食などは、すべて神郡及び神戸の神税を用い、不足の場合は正税（国庫）から補充すべきことがみえています。これによっても遷宮にかかる国家的意義の容易ならざることが知られます。以上長くなりましたが、古代・中世における神宮式年遷宮の概説を致しました。また大倉さんから、来年度の奉納についてもお誘いいただくことになると思いますが、近世・近代の概説については、来年のご挨拶文にとっておくこととし、お祝いの言葉と致します。

歌代神社
加茂歌代
8:00 - 9:00
p.11

大山祇神社
相川
8:00 - 8:35

総源寺
相川
8:40 - 9:00
p.12

小泊白山神社 能舞台
羽茂小泊
8:00 - 10:00
p.13

加茂神社 能舞台
粟野江
8:00 - 12:30
p.14

大膳神社 能舞台
竹田
8:00 - 12:30
p.16

大崎白山神社 能舞台
羽茂大崎
10:30 - 13:30
p.18

多聞寺
平清水
12:00 - 14:00
p.19

佐渡諏訪神社
潟端
12:00 - 14:00
p.20

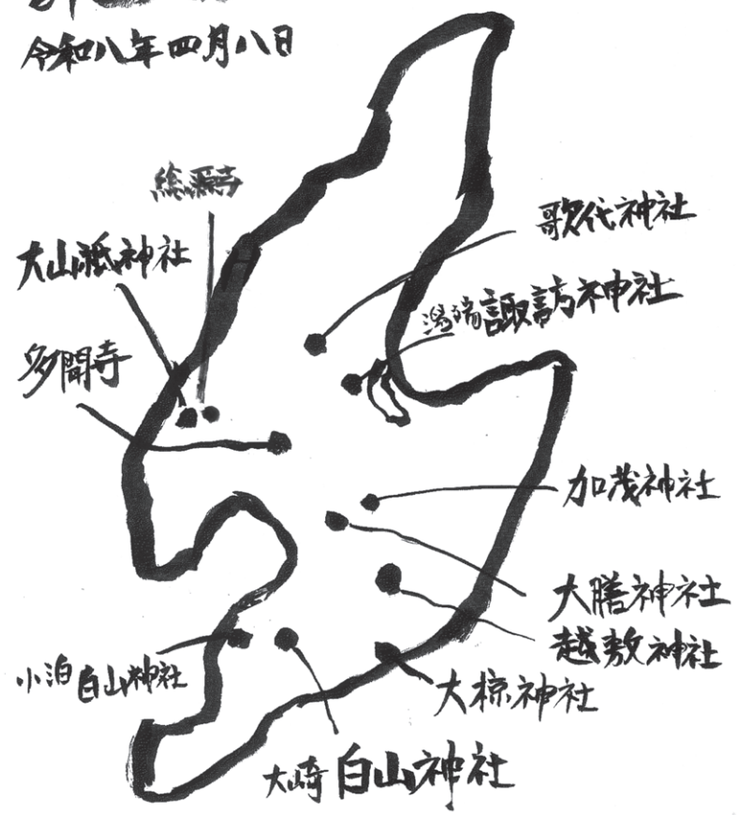
オーガニックマーケット
12:00 - 15:00
あいぽーと佐渡

直会
15:00 - 18:00
あいぽーと佐渡

佐渡諏訪神社
潟端
薪 能
18:00 - 20:00
p.21

飛天双〇能 佐渡

令和八年四月八日



飛天双〇能 佐渡　演能場所・日時

4月6日午後始め(非公開)
越敷神社

4月8日8時始め
歌代神社
佐渡市加茂歌代3963-1

4月8日8時始め
大山祇神社
佐渡市相川下山之神町

4月8日8時40分始め
総源寺
佐渡市相川下山之神町3

4月8日8時始め
小泊白山神社 能舞台
新潟県佐渡市 羽茂小泊 1494

4月8日8時始め
加茂神社 能舞台
新潟県佐渡市栗野江

4月8日8時始め
大膳神社　能舞台
佐渡市竹田562-1

4月8日10時半始め
大崎白山神社 能舞台
佐渡市羽茂大崎1650

4月8日12時始め
多門寺　特設舞台
佐渡市平清水1003番地

4月8日12時始め と 18時始め
佐渡諏訪神社(潟端) 能舞台

大椋神社
佐渡市徳和(未定)

飛天双〇能

加茂歌代神社 胃八日八時

神歌

上野朝義
上野朝彦

一管 三番三　赤井要佑

舞囃子

高砂 上野雄三 上野義雄 上田懐也
森澤勇司 赤井要佑

地謡

赤井きよ子
上野朝彦
上野朝義
寺澤幸祐
上野雄介

能楽演能番組

令和八年四月八日午前八時始ノ

大山祇神社　拝殿

素謡
神歌　翁　梅若紀彰
千歳　山中迫晶

一管
三番三　笛　槻宅聡

仕舞
加茂　小早川康充
井筒　山早川泰輝
高砂　馬野正基

総源寺
放下僧　山中迫晶
敦盛　馬野正基
山姥　梅若紀彰

小泊　白山神社　能舞台
能楽演能番組　四月八日八時始ノ

素謡
翁　辰巳満次郎　上野能寛　山内崇生
千歳　辰巳孝弥　地謡　藤井秋雅　佐野登　辰巳大二郎　澤田宏司

三番叟　三宅右矩
大鼓　大倉栄太郎
小鼓　住駒充彦
笛　能本俊太郎

仕舞
田村　上野能寛
羽衣　山内崇生
網之段　佐野登

地謡　辰巳大二郎
澤田宏司
藤井秋雅

天能
高砂　シテ　土屋周子
ワキ　原　大倉栄太郎
大鼓　大倉栄太郎
小鼓　住駒充彦
笛　能本俊太郎
総出　宝来

後見　佐野登　藤井秋雅
地謡　上野能寛　山内崇生　辰巳大二郎　辰巳満次郎　辰巳孝弥　澤田宏司

加茂神社

能楽演能番組　能舞台

四月八日八時始ノ

翁　佐々木多門　三番三　茂山千三郎

千歳　山本善之

狂言後見　黒川亮　中村陸

大鼓　観世流大倉正弘　太鼓　吉谷潔

小鼓　明治流林吉矢衛　小鼓　観世流林大輝　斉藤敦

半能　高砂　シテ　内田成信　ワキ　原陸　ワキツレ　高安多寿　小鼓　観世流林大和

後見　香川靖嗣　高林呻二

地謡　金子龍蔵　大島輝久　谷友矩　長島茂　高林昌司　狩野了一

狂言　千鳥　シテ　大蔵流茂山千三郎

酒屋　中村陸

主人　宮崎大知

後見　黒川亮

半能　箙　シテ　栗谷浩之　ワキ　村瀬提

後見　友枝雄人　高林昌司

大鼓　大村滋二　小鼓　横山幸彦　笛　高村裕

松井俊介　佐藤寛泰　長田弼　金子敬一郎　佐藤陽　友枝真也

能　鶴　シテ　大村定　ツレ　谷友矩

後見　金子敬一郎　長田弼

地謡　大島輝久　佐藤多門　金子龍蔵　狩野了一　狩野祐一　内田成信

大鼓　柿原光博　太鼓　吉谷潔

小鼓　林大和　笛　リチャード　エマート

能　猩々乱　シテ　友枝真也

後見　高林呻二　佐藤寛泰

地謡　松井俊介　佐藤陽　大村定　狩野祐一　長島茂　友枝雄人　相原一彦

大鼓　柿原光博　太鼓　吉谷潔

小鼓　横山幸彦　笛

大膳神社　能舞台

能楽演能番組　四月八日八時始ノ

翁　辻井八郎

神楽式　鈴之段　大蔵彌太郎　大鼓　柿原光博　小鼓　久田舜一郎　笛　相原一彦

後見　大蔵章照

後見　中一馬　地謡　山井綱雄　井上貴覚　本田布由樹　大塚龍一郎

舞囃子　高砂　井上貴覚　大鼓　柿原光博　太鼓　大川典良　小鼓　久田陽春子　笛　相原一彦

地謡　本田布由樹　中村昌弘　大塚龍一郎　加々井猛

狂言　佐渡狐　シテ　佐渡の百姓　小アド　奏者　小肴平真路　アド　越後の百姓　大蔵章照

後見　山口耕迪

能　経政　シテ　雨宮悠大　ワキ　舘田善博　大鼓　鬼頭英二　小鼓　森澤勇司　笛　相原一彦

後見　山中一馬　本田芳樹　地謡　山井綱雄　中村昌弘　壱岐大四郎　井上貴覚　大塚龍一郎　加々井猛

能　六浦　シテ　本田芳樹　ワキ　梅村昌功　大鼓　上野義雄　太鼓　加藤洋輝　小鼓　船戸昭弘　笛　槻宅聡

間　山口耕道

後見　辻井八郎　本田布由樹　地謡　山下春樹　中村昌弘　壱岐大四郎　山中一馬　涌井明　雨宮悠大

仕舞　玉葛　中村昌弘　地謡　井上貴覚　本田芳樹　雨宮悠大　壱岐大四郎

能　鵜飼　シテ　山中一馬　大鼓　上野義雄　太鼓　加藤洋輝　小鼓　後藤嘉津雄　笛　槻宅聡

ワキ　梅村昌功　ワキツレ　舘田善博

間　茂山忠三郎　大塚龍一郎　井上貴覚　辻井八郎　本田芳樹　地謡　本田布由樹　加々井猛

後見　山井綱雄　雨宮悠大

大崎 白山神社 能舞台

能楽演能番組 十時三十分始ア

翁

千歳 梅若志長 面箱 泉 慎也
津村禮次郎 三番叟 小笠原由祠
千歳 梅若志長

大鼓頭取 大倉正之助
小鼓胴脇 住駒匡彦
小鼓頭取 幸 信吾
小鼓手先 幸 泰平 笛 斉藤 敦

梅若雄一郎 梅若 雅一
加藤貞悟
後見 梅若泰志
梅若紀長
地謡 上野朝彦
山中雅志 梅若猶義
古室知也 長谷川晴彦
狂言後見 能村晶人 中尾史生
働 萩原郁也
加野鉄音

羽衣 梅若 紀佳

能

高橋 正光 大倉正之助 姥 浦理紗
幸 泰平 山村友子
加野鉄音
萩原郁也
古室知也
梅若紀長
梅若泰志
知恵之舞
後見 野村昌司
梅若雅一 地謡

船弁慶 梅若千喜世 梅若 紀長

安田 登

與津健太郎

住駒匡彦 山村友子

梅若雅一郎
梅若雅一
梅若猶義

地謡 加野鉄音
古室知也
梅若泰志
山中雅志

後見 梅若紀佳
加藤貞悟
地謡 加野鉄音
萩原郁也
梅若雅一
梅若志長
長谷川晴彦

半能

竹生島 仕舞
草子洗小町
笠之段

半能

高砂 野村昌司

安田 登 大鼓 大倉正之助 大鼓 大川典良
小鼓 住駒匡彦 笛 斉藤敦

後見 上野朝彦
山中雅志
地謡 梅若千喜世
梅若紀長
萩原郁也
長谷川晴彦
加野鉄音
古室知也

老松 仕舞

松風 山中雅志
笠之段 長谷川晴彦
梅若泰志

地謡 梅若志長
上野朝彦
加藤貞悟
梅若雄一郎

多聞寺 特設舞台

四月八日 正午始ア

神歌 翁 上野朝義

三番三 茂山千三郎 大鼓 大村滋二 小鼓 幸 信吾 笛 赤井要佑

高砂 仕舞 寺澤幸祐
羽衣 赤井きよ子
桜川 上野雄三 狂言 地謡 上野雄介 山中通晶 馬野正基 小早川泰輝

福の神 黒川亮 参詣人甲 中村陸 参詣人乙 宮崎大知
後見 茂山千三郎 山本善之

屋島 仕舞 山中通晶
杜若 梅若紀彩
養老 上野雄介
小袖曽我 舞囃子 小早川泰輝 小早川康充
鞍馬天狗 馬野正基 大鼓 大村滋二 太鼓 上田慎也
小鼓 森澤勇司 笛 赤井要佑
地謡 上野雄介 山中通晶 上野雄三 赤井きよ子 寺澤幸祐

潟端 諏訪神社 能舞台

能楽演能番組 四月八日 正午 始ム

翁

素謡 翁 佐野登

千歳 藤井秋雅 地謡 辰巳太郎 辰巳満次郎 上野能寛 山内崇生 辰巳孝弥 澤田寅司

三番叟 三宅近成

大鼓 大倉栄太郎 小鼓 住駒克彦 笛 熊本俊太郎

仕舞

田村 辰巳大二郎

羽衣 澤田宏司

桜川 辰巳満次郎

地謡 辰巳孝弥 山内崇生 上野能寛

半能

高砂 シテ 柏山聡子 ワキ 原隆 ワキツレ 高貴安喜 大鼓 大倉栄太郎 小鼓 住駒克彦 笛 熊本俊太郎

上野能寛 山内崇生 藤井秋雅 佐野登 辰巳孝弥 澤田宏司

後見 辰巳満次郎 辰巳太郎 地謡

狂言

蝸牛 シテ 山伏 小笠原由祠 下シテ 泉順也

小アド 太郎冠者 能村晶人

後見 中尾史生

潟端 諏訪神社 能舞台

能楽演能番組 四月八日 十八時始ム

舞囃子

岩船 上野朝彦 上野義雄 吉谷潔 上野雄介 寺澤幸祐 森澤勇司 赤井要佑 地謡 上野朝義 赤井き子

屋島 梅若紀彰 大村滋二 幸信吾 赤井要佑 地謡 梅若雄一郎 山中通晶 上野雄三 山中雅志

狂言

寝音曲 太郎冠者 茂山忠三郎 主人 茂山千三郎

後見 山本善之

新作能

長崎の郵便配達 ワキ 原大 大鼓 大倉栄太郎 小鼓 横山幸彦 笛 斎藤敦

間狂言 奥津健太郎

後見 野村昌司 山中通晶 地謡 加野鉄音 古室知也 梅若千音也 長谷川晴彦 蔡東郁也 梅若泰志

子方 中澤一華 村田沙樹 古林詩栗 本間文人 本間史華

ビーター 西神 津村強次郎

谷口スミエ 東神 加藤真悟

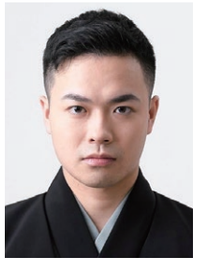
能楽師紹介

大倉流
大鼓方
上野義雄

観世流
シテ方
上野朝彦

喜多流
シテ方
粟谷浩之

森田流
笛方
相原一彦



宝生流
シテ方
上野能寛

観世流
シテ方
上野朝義

和泉流
狂言方
泉愼也

観世流
シテ方
赤井きよ子

喜多流
シテ方
内田成信

観世流
シテ方
上野雄介

金春流
シテ方
井上貴覚

森田流
笛方
赤井要佑

金春流
太鼓方
姥浦理紗

観世流
シテ方
上野雄三

金春流
太鼓方
上田慎也

金春流
シテ方
雨宮悠大

喜多流
シテ方
大島輝久

大蔵流
狂言方
大藏章照

観世流
シテ方
梅若泰志

観世流
シテ方
梅若猶義

観世流
シテ方
馬野正基

金春流
シテ方
大塚龍一郎

大倉流
大鼓方
大倉栄太郎

観世流
シテ方
梅若雄一郎

観世流
シテ方
梅若紀佳

宝生流
ワキ方
梅村昌功

喜多流
シテ方
大村定

大倉流
大鼓方
大倉正之助

観世流
シテ方
梅若志長

観世流
シテ方
梅若紀長

観世流
シテ方
梅若紀影

大倉流
大鼓方
大村滋二

大蔵流
狂言方
大藏彌太郎

金春流
太鼓方
大川典良

観世流
シテ方
梅若雅一

観世流
シテ方
梅若千音世

大蔵流
狂言方
黒川亮

喜多流
シテ方
狩野祐一

観世流
太鼓方
加藤洋輝

喜多流
シテ方
香川靖嗣

和泉流
狂言方
小笠原由祠

幸流
小鼓方
幸信吾

喜多流
シテ方
狩野了一

喜多流
シテ方
金子敬一郎

高安流
大鼓方
柿原光博

和泉流
狂言方
奥津健太郎

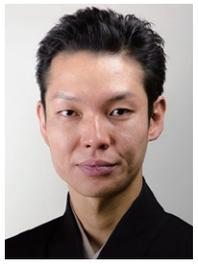
幸流
小鼓方
幸泰平

大鼓方
鬼頭英二

喜多流
シテ方
金子龍晟

宝生流
シテ方
柏山聡子

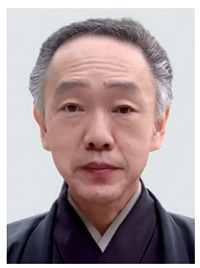
喜多流
シテ方
長田郷



大蔵流
狂言方
小斉平真路

森田流
笛方
熊本俊太郎

観世流
シテ方
加野鉄音



観世流
シテ方
加藤眞悟

金春流
シテ方
加々井猛

喜多流
シテ方
高林呻二

幸流
小鼓方
住駒匡彦

宝生流
シテ方
佐野登

森田流
笛方
齋藤敦

幸清流
小鼓方
後藤嘉津幸

一噌流
笛方
高村裕

幸流
小鼓方
住駒充彦

宝生流
シテ方
澤田宏司

喜多流
シテ方
佐々木多門

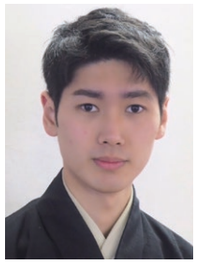
観世流
シテ方
小早川泰輝

高安流
ワキ方
高安受壽

宝生流
ワキ方
高橋正光

大蔵流
狂言方
茂山千三郎

喜多流
シテ方
佐藤寛泰



観世流
シテ方
小早川康充

宝生流
シテ方
辰巳大二郎

喜多流
シテ方
高林昌司

大蔵流
狂言方
茂山忠三郎

喜多流
シテ方
佐藤陽

観世流
シテ方
古室知也

幸清流
小鼓方
森澤勇司

和泉流
狂言方
三宅右矩

幸清流
小鼓方
船戸昭弘

高安流
ワキ方
原陸

幸流
小鼓方
林吉兵衛

宝生流
ワキ方
安田登

和泉流
狂言方
三宅近成

金春流
シテ方
本田布由樹

大倉流
小鼓方
久田舜一郎

幸流
小鼓方
林大輝

金春流
シテ方
山井綱雄

大蔵流
狂言方
宮﨑大知

金春流
シテ方
本田芳樹

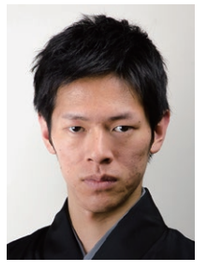
大倉流
小鼓方
久田陽春子

幸流
小鼓方
林大和

宝生流
シテ方
山内崇生

福王流
ワキ方
村瀬提

喜多流
シテ方
松井俊介



宝生流
シテ方
藤井秋雅

高安流
ワキ方
原大

和泉流
狂言方
能村晶人

和泉流
狂言方
中尾史生

観世流
シテ方
寺澤幸祐

森田流
笛方
槻宅聡

宝生流
シテ方
辰巳孝弥

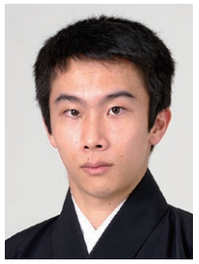
観世流
シテ方
野村昌司

喜多流
シテ方
長島茂

観世流
太鼓方
徳田宗久

金春流
シテ方
辻井八郎

宝生流
シテ方
辰巳満次郎



観世流
シテ方
萩原郁也

金春流
シテ方
中村昌弘

喜多流
シテ方
友枝真也

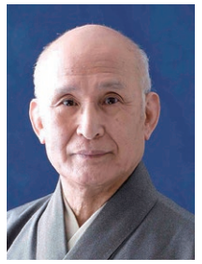
宝生流
シテ方
土屋周子

宝生流
ワキ方
舘田善博

観世流
シテ方
長谷川晴彦

大蔵流
狂言方
中村陸

喜多流
シテ方
友枝雄人



観世流
シテ方
津村禮次郎

喜多流
シテ方
谷友矩

能舞台のある森　高橋信一

力つよく刻まれた佐渡の日常

高校の美術講師だった高橋信一さんの教えにより島内各地に版画グループが生まれ、それはやがて佐渡版画村運動となった。その作品たちを見て欲しい。農家や漁民が日々の作業の隙間に掘ったという版画にたいへん感嘆する。やはり広大な佐渡の土は文化の根っこを支えている。いま質の高い生活の普及は、過疎化だけで終わらさないという現代人が生きる知恵の土台になる。世界中が探し求めている本質の源流は土に忍んでいる。

協力 佐渡版画美術館

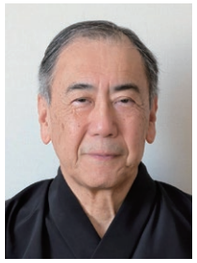
金春流
太鼓方
吉谷潔

観世流
シテ方
山中雅志

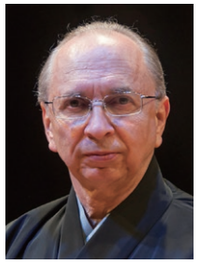
大蔵流
狂言方
山口耕道

金春流
シテ方
吉成大四郎

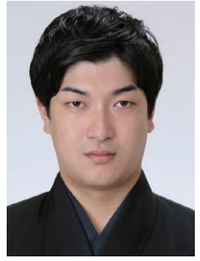
藤田流
笛方
山村友子



金春流
シテ方
山下秀樹



一噌流
笛方
リチャード・エマート



大蔵流
狂言方
山本善之

観世流
シテ方
山中迓晶

金春流
シテ方
涌井明

幸流
小鼓方
横山幸彦

金春流
シテ方
山中一馬

佐渡の
能舞台

日野八潮さん　大膳神社宮司

――この一年毎月佐渡にお邪魔して佐渡の四季の景色を拝見しております。この地に能舞台が沢山ある事へ日に日に理解が進んできたように思います。大膳神社さんの舞台は島内最古とも聞きますが、宮司は何代目でいらっしゃいますか。

私で30代目です。佐渡のこの場所でお宮を守っていくと言いましょうか、継いでいくと言いましょうか。多分ですがご先祖方や先輩方も、色んな意味で簡単じゃなかったと思うんですよね。綺麗事や理屈だけでは絶対いかないでしょうし、いろんな都合もあり事情もあり、その中でこれだけの長い時間が流れてきたのだろうなと思います。先輩方は本当に大変だったのだろうなと心から思います。だけどそんな中でも私が分かる範囲の先輩方、つまり私の婆さんだとかそのぐらいの年代の人たちが、とにかく能が好きだったっていう姿が記憶に残っているのですが、大変だったけれども守りたかったんだなと、その一心でやってきたんだろうなと思うと、私もなんとかそれを継いでバトンを後ろに渡していきたいな、いけたらいいなって思います。

――宮司が子供の頃よりずっと前からこの能舞台はあったのですものね

そうですね。記憶の中にずっとありますね。私はこの地で生まれて、私が小さい時に明治20年代の生まれの祖母がおりまして、もう亡くなっておりますけれども、とにかくひたすら能が好きだった。よくいろんなところで「地元の人々に密着した能」なんていう言葉を聞きますけども、とはいえ普通の生活の中でそんなに能が顔を出してくるわけじゃないんです。ただ、時として祖母の姿からは「密着」を実感することはありました。例えば祖母が風呂に入っている時などに自然に鼻歌を歌うような感覚で能が出てくるっていうのでしょうかね。そういう意味での距離感の近さです。能の話が始まると止まらないですよ。佐渡弁で言うと、「能ほどいいもんあるかっちゃ」って言うんですよね。風呂に入って「羽衣」などの一節なんかを婆さんが湯船に浸かりながら気持ちよさそうに歌ってる。またある時にはそこに隣のじいさんが来て「ああ、能ほどいいもんあるかっちゃ」って佐渡弁で話をしているその感じ。

天気のよい時に芝生にペタッと座ってじーっと一日中能舞台を見ているあの爺さん婆さんたちの姿っていうのは鮮明に覚えてます。何を言うわけでもなくひたすらずっと「いいなぁ」って喋っている。何がどういう意味だかわからない子供からすると「あ、そうなの」みたいな感じだったのですけど、本当に嬉しそうに「ああ、能ほどいいもんあるかっちゃ」を言い続けている。あったかい日の中で亡くなった爺さん婆さん達がそういう会話をしている姿はとにかく記憶に残っています。ですからもうボロボロに傷んでいる能舞台ですけれども、やっぱり先輩方のためにもというか、その思いのためにも何としてでも残していかなきゃなっていう気持ちになりました。すみません、昔話です。

それでも若い方で少数ですけどね、能に関わってらっしゃる方もいますし。隣の集落ではプロになられた方もいたりとか。もちろん数は少ないですけども、やっぱり過去とつながっているんだなっていう感じはします。例祭の能が復活してからはずっと真野の能楽会の方が奉納してくださっています。それ以外にもいろんな方が舞台を使っていろんなものを演じてくださっている。時には全国からいらして舞台を使っていろんなことをされている。ありがたいなと、嬉しいなと思いますね。

有形民俗文化財の指定というのも要するに能というとても大事な芸能でしょうかね、これを演じていく場所としての建物の文化財指定なんだというような説明を受けて、使い続けていることが大事だと。そういう趣旨から言っても本当に使っていただくっていうことがどれほどありがたい事か。ここの能舞台はよぼよぼのお爺ちゃんになってますがまだまだ現役だぞというような。いい意味での張り切りというか、負けるもんかみたいな。頑張ってくれてるなっていう感じがありますね。そうするとこっちも応援で頑張れってなりますし。

――能舞台を繋いでゆく誇りのようなものを感じ

ましたし、またそれに伴う責任を重んじておいでなのかなとも思いました。この現代にあれだけの能舞台を維持していく大変さとかあると思うのです。もしよろしければそういったことも教えていただけないでしょうか。

一般的に考えて想像つくことですがやっぱり維持費がかかります。具体的に言えば屋根の茅がなかったり、茅を葺く職人さんがいらっしゃらなかったり。まあまあお金につながっていきますよね。じゃあお金お金って騒ぐとむしろ逆で、そんなことばかりをやってると、みんな誰が行くかあんな所って。私だったらそんな所へ行きたくないですし。笑。難しいとこですよね。

かといってお金なんか別にいらねえよって（笑）、言ってみたいもののだけども、お金がないと舞台が壊れちゃうというのも本当です。少なくとも言えるのは、能舞台は私個人の持ち物じゃないっていうことですよね。幼稚な言い方になりますが、神様のものだっていうのがまず前提です。神社のものってことは要するに神様のもの。神様と私は会ったことないんですけど、会ったことないけども何か多分きっと神様ってすごい存在だと思うのですね。その神様のものだとしたら一生懸命に能舞台を守っていきたいし、私らはそこに多分繋がっている存在なんだろうなと思います。懸命になんとかしてお気持ちに沿いたい、あるいは一生懸命にさせていただきたいっていう気持ちですね。うまく言えませんけど。あとやはり一番大変なところは、人の確保です。簡単なことではありません。

——今回の飛天双〇能でご奉納を終えた後、来てくださった皆様にやはり何か理解を持って帰っていただきたいなっていう気持ちがあるのです。

どうして能舞台がお宮にあるかというと、基本は神様に見ていただくためですものね。奉納という形はもちろん神様に見てもらうためです。きっとその姿は神様に見えるのではないかなっていう気がします。まあ、ちっちゃい声で言いますが、私は神様に会ったことないものですからね（笑）。ですが奉納をするこちら側の気持ちが大事なのだろうなと思いますね。そう思うと舞台を使っていただくっていうことは神様に見てもらおうという想いで演じていただく。そういう場所として使っていただくという機会があるっていうのは、すごくありがたいというか心に感じるところです。

そのために一生懸命に能舞台を維持している。傷んだら治す。痛まないように気をつける。まあ傷んでますけども。それでも掃除をするとか。要するにそういう事なんでしょうね。使っていただくために、神様のために、というところに戻っていくんだろうなという感じがします。

——宮司にとって大膳神社の能舞台はどういった存在ですか

私たちと神様を繋いでくれる大事な場所と言ったらいいでしょうか。能という素晴らしい芸能を通して私たちが神様とつながる機会を得られるんだとすれば、そのとっても大事な機会を提供してくれる場所かと思います。それをまたみんなで見ていただいて、共有してもらうための場所。それこそ最近の流行りの言葉で言えば、「いいね」みたいなものですけども。それこそさきほど話したお婆さんの話で「能ほどいいもんあるかっちゃ、なあ」「そうそう、そうだなぁ」っていうあのトーン。ニコニコ笑って「なぁなぁ」。それが今風に言うと「だよね」や「いいね」になるのかなっていう感じがしますし。みんなで「そうだね」と一緒に共有するための大事な場所。神様へ向けて演じてくださる方と、それを見せてもらっている私たちとも共有できる。観客同士でも共有できる。

佐渡にはこれだけ舞台がいっぱいある。新潟県というのはお宮が一番多いそうで、さらにその中でも佐渡っていうのはとても多いそうです。島を周ると分かるように海岸線浦々に一つ出っ張り曲

大膳神社宮司　日野八潮

がるとすぐまたお宮。またお宮、またお宮みたいにね。沢山のお宮、お寺さんもいっぱいありますし。きっと心の中で神様や仏様などそういう目に見えないけども大事っていうものを本当に大事にしてきたという佐渡の皆さんの気持ちがそこに現れていると思います。私もそれをやっぱり大事にしていく。それに関われるっていうのが一番の喜びでもありますね。ありがたい場所なのです。

2026年1月　大膳神社にて

近江幸次さん　佐渡諏訪神社（潟端）

――佐渡諏訪神社（潟端）能舞台を管理されてますが、何故担うことになったのでしょうか

40年くらい前に東京の観世会・津村禮次郎さんが私どもの舞台を使うことになったんです。当時、多分うちの父は区長でしたが、貸すためには舞台を使えるように直さなくてはいけないと舞台を直しに行ってたんです。父は百姓というか手先が器用で大工仕事も少しはできたのでね。父は私と違って酒を飲んで遅く帰るということもなかった人ですが、夜8時過ぎになっても家へ帰ってこない。母親は心配症な人で私に行ってこいというから神社まで見に行ったんですよ。そしたら父親が鏡の間で鉋をかけながら、先生と学生が能の稽古している姿をずっと見ていて、それで私に「いいなあ」って言ったんですよ。私は何がいいのかよくわからなかったけど、その時の父がまあ嬉しそうな顔してたんですよね。それが忘れられなくて。その1年後ぐらいに父親が不慮の事故で亡くなったものですから、余計父親に対する思いが強くなりまして。その後、池野平太郎さんという佐渡の宝生流の方が津村禮次郎さんのお世話をするようになったので、私も父が好きだった事ならということで、お手伝いするようになったのがきっかけですね。

それから私が郷土史を習ってた田中圭一先生が、佐渡高校から筑波大学へ行かれまして、私の生きる目的とは言わないですけど、私を満足させるというか、知的に満足させてくれる存在が佐渡からいなくなってしまった。そこへ津村禮次郎さんが来たんです。津村先生といろいろお話しするうちに楽しいなと思えるようになってきたという事もひとつありますね。津村さんとは1年に1回しか

会えないんですけど、夏になると学生と一緒に来て彼らと酒を飲みながらお話したりするのが、1年のうちで1番楽しい時期です。

――能舞台という文化財を管理するとは今どういう状況なのでしょうか

うちのは県の文化財民俗文化財ですね。管理については特に気を使うことはないです。潟端の舞台も民俗文化財ですが、私どものところは幸い一橋大学の学生が来て、1年に1回は必ず舞台を開けて掃除をするので、使うことに特に気を使ったことはないです。

ここは大正13年にできた舞台で、地元の人たちはこの存在を当然のこととして受け止めてくれています。でも記録を見ると最初のこけら落としみたいな時の1回ぐらいしか演能記録は残ってなくて、きっと開かずの舞台になってたと思うんです。その後、池野平太郎さんたちが中心になり、津村先生が来るのもあって、あそこ直そう、ここ直そうということで、だんだんに今の形になってきました。それまでは物置になって荒れた舞台だった。使うことによってそこそこ手入れされた舞台になってきたと思います。

――管理する立場から佐渡の能舞台の現状はどうでしょうか

難しいですよね。大変なのはわかるんですよ。みんながその維持管理していくのに大変なのはわかるけど、なんていうかな、あまりひどくならないうちに手をかけてれば金額は少なくて済むわけですよね。能舞台とか文化財に対する世間の理解が薄れてきてるんだろうなと思います。行政を含めてね。

例えば島の外の人から見るとすごいもんだってわかるんだけども、佐渡だけではなくて日本人の特性かもしれませんが、外の人が認めてくれるとようやくわかるというか。島の人にとってはすぐ傍にあるものだから、もののありがたさとか価値がわからない。

それと、能をやる事について聞いてみるとお金がかかる。能が娯楽というかどうかはまた別にして、近年はそれ以外に娯楽があるから、能がだんだん庶民から離れていくっていうかな。

――佐渡の能。希望を聞いてみたいです

希望があるかな。今回を機会にプロというかそういう人たちがどんどん佐渡に入ってきて、佐渡の舞台を使ってやってもらえると少し目も覚める。佐渡で今能をやってる人も含めてですけど、いいものを見ないと上達しないっていうか上へ行かないと思うんですよね。うまいものを食べると、やっぱりもっと美味しいものを食べたいと思うだろうし、いいものを見れば、自分ももっと上手になりたいと思うだろう。今は本当に井の中の蛙で。

例えば津村さんが他の人を連れて来ても、能をやってる人が見に来るという感覚が薄い。僕が見る限りでは観世のプロが来るんだから見てみたいとか。例えば相川の春日神社能舞台でやっても、そういう人たちがあまり見に来ないというのは逆に言うと不思議に思いますよね。せっかく安い料金で島外出なくても見れるのに。

――佐渡の能の良いところを教えていただきたいです

それはわかりません。強いて言えば、僕のとこへ津村先生が学生と来てお稽古やってる時に、先生の車がバッテリー上がって車の整備の人を呼んだんです。車は動くようになったんだけど、その整備の青年が帰らないんですよね。ずっと見てるんです。お前どうしたんだって聞いたら、いや僕も小さい頃習ってたんでといって見てる。ああそうかと思って。そういう意味では底辺という言葉は嫌いですけど、裾野はあるんだなというふうに思いますね。

小学校や中等で習っている子どもたちが、どっかでかじっていれば、今は習ったことあるよっていうだけかもしれないけど、それが将来どこかで目覚めるきっかけになるかもしれないというのが希望といえば希望ですよね。

――飛天双〇能は近江さんに多大なるご協力をいただいています。変わった人たちだらけで驚いたかと

いいえ、それは全然思いません。かつての珈琲のコマーシャル、寺山修司が「明日どんな人に出会えるか、それが人生の楽しみだ」ってことを言った時に、うーんと思って聞いてたんです。やっぱりこの島の中にいると、出会える人っていうのは限られる。しかも自分の周波数にあった人に出会えるのは限られる。去年、一昨年、大倉正之助先生が来てこういうことをやりたいんだって言われた時、そして去年ぐらいから毎月佐渡に入ってきていろんな場所にご一緒するようになった。私にとってそれこそ1番幸せな時間でした。70過ぎてこんなに自分の周波数の合う人たちに出会えるとは思ってもみなかった。幸せな時間ですね。変なのが私の周波数に合うんですよ。

今回これだけ多くの能舞台を開けることになって準備をやってますけれど、オペレーションは大変だし、大勢の先生方を迎え入れることも大変だし。それと同時に地元の方々に喜んでいただきたい一心でやってます。昨日も地元にちゃんと話をするとみんな顔つきが変わってくるんですよ。だからコツコツやらないといけないなと思いました。

――この1年間、佐渡のいろんな場所へ連れてってくださいました。結構走り回りましたよ、近江さんと

まあ距離は走ったね、結構走りましたよ。行ったり来たりしました。走りまくった足跡残ってると思いますよ。

今回の「しめ縄作り」でいろんな人が協力して参加してくれて。彼ら彼女らも能自体がよくわからなくても、その大倉正之助先生の考え方とか能に少しずつ目覚めて、彼らが能をやるやらないは別ですけども、そういう文化的なものの価値に少しずつ目覚めていって、次につなげてくれればいいなと思いますね。

――佐渡の能が今後どうなるといいとお考えか、もう一度お聞かせいただけないでしょうか

何ですかな。今回の飛天双〇能はいろんな流派の人が入ってくるわけですけど、家元制度というかそういうのが昔からあるものはみんなそうですけど縄張り争いをしてるよ。いろんな芸能も当然違っていいんですし、上手い下手があるのがそれは当たり前のことで。それをどうこう言わずに混血してもいいと思うんですよね。混ぜ合ってもいいと思うし、そこで切磋琢磨することで、佐渡の能が次のステップに行けるんじゃないかと思いますね。

2026年2月　佐渡両津にて

佐渡諏訪神社（潟端）有形民族文化財
加茂湖の西側、諏訪の集落入口左に位置している。参道が長く奥行きがあり鎮守の杜が深い。能舞台は大正13年に建築されたもの。

「猿八座」は自分の動きであり独自

西橋八郎兵衛さん　人形浄瑠璃猿八座

――歴史的に文化や芸能を重んじていた佐渡にて、令和時代に西橋先生がそのひとつを担っていらっしゃると思うのです。その深い思いを教えていただきたいのです。

佐渡も広くてね。私が佐渡に来た目的は文弥人形を使いたいっていうことで、ただただそれだけのために佐渡に来たのです。佐々木義栄先生という真野の大神宮の宮司さんに相談に行ったら大崎座というのがあるよということでした。それで47年前、大崎宮本坊の本間敞政さんというお坊さんを頼って行ったのです。当時他に島内に十座ほど人形の座がありました。そしたらいつでも来てくれっていうことでして、それで大崎座へ入ったのです。それからお坊さんが家を探してくれたんですけど、住むところがなかなかね、当時はよそから来てパッと住める家を貸してくれるってことはまずなかったですね。それだけ今ほどよそから佐渡に住み着くっていう人は少なかったんです。

――佐渡に来て実際どうでしたでしょう？

それまで文楽の三人遣いをやってたんですけど、それとは違いますしね。一人遣いの構え方っていうのがまた三人遣いとちょっと違うので最初ちょっと戸惑いましたけど。ただやっぱり基本的な使い方っていうか、文楽で言えば主（おも）遣い。これは頭（カシラ）と右手を持つわけです。あと三人遣いのあとの二人というのは、左手専門の遣い手、それから足専門の遣い手、こういう風になるわけですね。それで三人で遣うんです。だから頭（カシラ）を持って右手も使うというこれは同じなんですよ。一人遣いでも。だから最初のちょっと構え方さえ身につけたら、これは一人遣い、三人遣いと同じでできるんだなって。

そういうことはあまり佐渡の方はなさらないね。元気に振り回すような動きが得意というか、人気があるんですね。ただよくよく考えてみたらゆっくりした動きでも、一人遣いで十分できると私は思いました。佐渡の遣い方もまだまだ学びたいと思って、そっちはそっちでやめないで、新たに猿八座っていうのを起こしたわけです。だから佐渡の文弥人形とは私は違うわけですね。猿八座は自分の動きであり独自なのです。

――それは西橋さんの挑戦なのでしょうか

挑戦というより、私が文楽にいたってことは大きいかもしれないですね。それが一人遣いでも技術的なことができると分かっていてやらない手はないじゃないですか。

――佐渡は文化度が高かったと聞きました

高いです。今はどうでしょうね。もともと佐渡はそういう雰囲気でしたよね。「なんせ天領な島だったんだからね」って、それがもう二言目に

人形浄瑠璃猿八座　西橋八郎兵衛

左から西橋さん、（奥様）染織家　西橋はる美さん

越敷神社
新潟県佐渡市猿八289番地
飛天双〇能 令和8年4月6日奉納（非公開）

あったよね。天領だった天領だったと、だからそれこそたしなみとしてまあ各々一節。それからお茶、茶道、生け花、全部たしなむと。

私は学校中退してすぐ文楽に入っちゃったんですよ。だから文楽が本職だったんですね。その生活を辞めて佐渡に好き好んで来た。でも佐渡へ来たらそれでは食べていけないっていうのは最初から分かってました。だから何をやってもいいから、もう好きな事では稼がないということで来たんです。仕事は何やったっていいじゃないかと。

——人形のためにですか？

そうそうそう。

——ご自分のテーマを早く見つけたっていうのが良かったんでしょうか

テーマというか、やりたいことですよね。やりたいことが20歳ちょっとで見つかって、もちろん嫌になったこともありましたけどね。だけど続けて来られたっていうのは、結果的に良かったなと思っています。

——時間が経ってもブレない佇まいが素晴らしいです。

鳥越文庫
静かな山の佐渡市猿八地区に舞台芸能・民俗に関する書籍が約二万冊所蔵されている図書館がある。書籍は猿八座の西橋さんとのご縁により古典芸能研究・早稲田大学名誉教授の鳥越文蔵氏が寄贈されたもの。静謐な時を過ごせる文化的な場所。

新潟県佐渡市猿八329番地
電話　0259-66-2011
開館時間　9時から17時まで
休館日　有り

ブレてるところもありますけどね。だって猿八座っていうのは本当に猿八で始めたんですよ。私の他にもう一人、よそから住み着いてる男がいましてそれと始めたんですね。ずっと地元の座にも入ってはいるんです。一人遣いってもっとこういうことができるんだよ、っていうことをやろうと思って猿八座を起こしたわけです。

——お話を伺っていると、伝統を伝承してゆく事を教わります

伝統になっていくっていうことに対してのヒントとして、ガッチガチじゃダメなんだっていう感じが非常にしています。実際そうだと思うのですよ。もちろん先の人たちが残してくれたものっていうのは大事にしなきゃならないと思うのです。それプラス、時代って変わっていくでしょう。そしたら私はそれなりに変えていいと思うんです。

2026年2月　佐渡猿八にて

左より相田敏明、細野幸太郎、大倉正之助

佐渡の能舞台

細野幸太郎さん
相田敏明さん
加茂神社 世話人

——お世話している皆さんにとって能舞台はどういう存在でしょうか

細野　ああ年に1回やってたね、今までな。もう10代がおらんし、能のなり手がやる人がおらんなくなった。

——これだけ立派な能舞台ですとお能をやりたいっていう方多いのではないでしょうか

細野　使ってくれても十分いいんだけど能をやる方がいない。

相田　問題は後継者がいないということでもあって。

——佐渡の皆さんは能を楽しんでいたと読んだことがあります

細野　謡の一つも歌えないとおかしい。母親なんかもプロやってね、やっぱり遊びって言うとやっぱ能、そうなんです。

相田　私のおじさんなんかも師匠だよ。大師匠だった。

細野　あ、やっぱり。結婚式では高砂でもすぐに謡がね。謡ができないとお酒もらえんもん。やると、ありがとう、飲めって。それだけ人々の生活に溶け込んでたんだよな。

細野　佐渡は世界遺産になった金や銀もあるしさ、ジオパークもあるし。でも佐渡もなんかそればっかりじゃダメになっちゃう。食文化とか芸能文化、郷土文化、そういうのを生かして世界に示さないと。

相田　そう、文化が消えていくわな。これじゃ。

2026年2月　佐渡粟野江にて

加茂神社
鶏を「使いしめ(神の使い)」をする神社。鶏大絵馬(市指定有形文化材)
「国仲四所の御能場」として由緒ある演能舞台がある。

佐渡に通って50年

津村禮次郎　能楽師

――お能を始めて佐渡に至るまでのお話しをうかがいたくて参りました。

僕は北九州地方の中学、高校で美術部で絵を描いてました。高校2年の時に全国油絵コンクールで入選して上野の美術館で展覧されたりして将来は絵をやりたかったのです。でも親は当然反対で教師もお前みたいじゃダメだよっていうものですからやめたんです。

東京の一橋大学に進学したら先輩が観世会でお能をやっていて、見にこいと言われて行ったところ僕としてはお能の構造的なものが面白かった。お能や謡を研究して文学的に国文学から入ったとか世阿弥研究でもなく感覚的なところからお能に入ったんです。

大学4年の時に津村家の家元のところへお手伝い兼ねて下宿させてもらいました。20歳過ぎてからプロとして舞台を目指すのだから時間は大切。やるんだったら決断しなきゃと思い、大学を卒業と同時に住み込みから書生として入れてもらったんです。美術の大学へ進む事を反対された頃、僕は一度自分の意志を折ってるんですよね。挫折ではないけど本音でないところで一度妥協したので今回はもうできないなと思った。親は勘当だと言ったけど能へ進もうと決めたんです。能は嫌いになったことは一度もない。でもお能のプロとして自分の性格でいけるかと人生で3回ほどの揺れ動きがありまして、先輩に「明日手をついて師匠に僕やめます、って言うからね」と告白したものの、次の日の師匠に言えなかったりしてました。

師匠の津村紀三子が60過ぎて隠居しようとしてたところに僕がぽっと行ったものですから師匠には後継者がいなかったんです。26歳の時に津村の養子になる話になって、これは僕も重圧を受けて伊豆のお寺へ10日間ぐらい家出したんです。僕の有名な家出事件。

能をやるだけだったら養子にならなくても師範とったりできますけど、ただ津村の芸積が途絶えてなくなっちゃう事はもったいないと思いました。尊敬してたし素晴らしいと思ってましたから。それで津村の養子になりました。

しばらくは津村の本名・大内、僕は大内禮次郎で出てました。津村という名前を継ぐ事は緑泉会の後継者だと宣言することになるわけでしょう。29歳で道成寺をやる時に津村禮次郎となりました。それからいろいろありましたけども僕が32歳の時に津村は亡くなりました。津村と一緒に生活して本当に師匠とぐっとやったのは10年間、たった10年なんですよね。

また僕はお寺好きで日蓮宗の修行をしてまして、25か6歳の頃に寺仲間と佐渡に行脚に行ったんです。それで佐渡との縁ができました。佐渡は日蓮聖人と世阿弥が流されてます。お寺に泊まりながら佐渡中を毎日25㎞から30㎞歩いた。そして30歳を過ぎた頃、学生のお能の合宿をやろうかという事になって、それから毎年50年、佐渡に通っています。今お世話になってる潟端の近江さんのところはもう40年。

――佐渡の何をご覧になられてきたのだろうかと

佐渡の人たちもいろんな思いはお持ちだと思うんですけれども、ここまでお能を守られてきて、でも今は大変辛いわけですよね。能の人口も減っていくし、能舞台はこんなにたくさんあるのに減っていきますし。そこに何かお役に立ちたいという気持ちは持っているのですけど。学生時代に佐渡を経験するのは悪くはないと思って学生を連れて行く事にしたんです。僕自身がすごいろんな影響を受けながらきましたし、佐渡の風土を彼らに経験させたいなって思いまして。

津村禮次郎

――お能をなさっている皆さんは特に佐渡に尊敬をお持ちですね

あります。初めて26歳の佐渡行脚の時、タクシーに乗ったんですよ。運転士がね、「僕は御室流のお花やっていて謡もやります」とか言う。タクシーの中で謡の交換やったね。50年前はまだそういう雰囲気があったんですけどね。

――佐渡でお能、どうとらえておいででしょうか

東京での自分の修練の場として例会など厳しい評価の中でやる。それも必要です。

または神社で原初的な芸能としての能。奉納で神様に御喜びいただくという感謝の気持ちを込めたことではあるんだけど、これが本来だよね。式学としてそうでなきゃいけないとか色々な人がいますけれども、僕はもうちょっと自由でもいいかなと思います。

2026年3月　東京武蔵小金井にて

佐渡は宝の島

井上ゆかり（わらじ職人）
井上妙涼（竹皮細工職人）
菊池はるみ（野草研究家）

——佐渡の自然と関わりある女性3人と座談会のように、現在の活動や佐渡についてお伺いしてみたいと思います。よろしくお願いいたします。

ゆかり　私は鬼太鼓が大好きで、ちっちゃい頃から血が騒ぐっていうかじっとしてられないんですよ、鬼太鼓の音を聞くと。小学生の時は男の子に混ざって鬼太鼓をやってました。東京にいる時も毎年必ず鬼太鼓のある時期は絶対佐渡に帰ってきて一番前で見てました。佐渡に帰って来てから娘が鬼太鼓を始めて私もちょっとずつ「太鼓叩きたいな」「叩きたいな」って言っていたら、勝手にやれさって言われて。ダンボール持ってって横で見ながら叩いてました。誰も教えてくれないからちょっとずつ太鼓を叩かせてもらえるようにいきました。それで衣装がほつれたら直してたりしているうちに、わらじも作りたくなって、何回かわらじを習ってたんですけど、習ってもしばらくやらないと忘れるんです。岩首のわらじ名人のお爺ちゃん、鷲崎（わっさき）の綺麗なわらじを作るお婆ちゃんに教わった。せっかく覚えても藁がないから皆んな結局続かないんですけど、有難い事に仲良くなったおじちゃんが藁とかくれるようになってから本格的に作るようになりました。

——鬼太鼓のわらじは1回使ったらもうおしまいですか？

1日持たない。半日持てばいい方な感じ。1回履いて休憩に脱いだらもう履けなかったりします。回ってる途中で破けちゃったやつをよく家の玄関に飾ってるところがあるんですけど、あれは縁起物というか厄除けです。鬼が履いたものだから、その力が宿るんですねかね。

——誰もが覚えられるものですか

覚えられます。でも藁がなくて続けられないと忘れちゃうから、そのためには藁を持ってる方と作り手たちの出会いが必要。最近は藁を残す人が少なくて脱穀と一緒に藁を細かく刻んで撒いちゃうんですよね。稲刈りの時点でもう藁がなくなっちゃう。手間だけどわらじを作るには稲架掛（はざかけ）っていう藁を天日干しする必要があるんですよ。鬼太鼓をやってる人たちもわらじのために藁を残す方に意識が向いてくれてる手ごたえはちょっとだけある。習いたい人も増えてきました。

はるみ　私の世代はまだ子育て中で、島外に遊びに行く事にステータスがあって、みんなそれを目指してお金を稼いでるから、そうすると手仕事みたいなのってすごく効率悪いし地味です。

ゆかり　わらじ作ってると、そんなんじゃ時給いくらにもならないって、私は絶対そう言われます。いや時給じゃないんだって思いながら作ってます。

はるみ　この技術は今まで何百年もやったのに今途絶えたら全部それ白紙になるんだよ。でも言っても伝わらないですね。

左から井上妙涼、菊池はるみ、井上ゆかり

——その辺の葛藤はどうなさってるんですか？

はるみ　ひたすら我慢我慢。

ゆかり　言ってもしょうがない。いろんな人がいるから。

——認められなくても自分は折れずにやろうっていう気持ちはどうしてですか？

はるみ　私は好きだからだよね。応援団が島の外にいる。

妙涼　はるみさんはファンがいっぱいいるから。

はるみ　自分の頑としてやりたいことをしてるだけ。

妙涼　私はママさんたちも一緒だと思っています。それぞれが自分にとって価値のある事、やりたい事をやっているだけ。竹皮の道のきっかけは葛原さんです。はじめは昔のことをやろうとかは全然なくって、ただ竹の問題があったから、竹を使えないかと思って相談したんです。

——竹の問題って何でしょうか

幼少期から岩首集落に母が毎年祭りを見に行ってて、くっついて行ってたんです。友達の家に泊

井上ゆかり

まって一緒に遊んでいると竹が倒れていて道が通れなくなったとか、竹が大変だっていう話をよく聞いて目にしてて。なんとかできないかなと思ってました。竹皮に出会ったのはちょうど大学を卒業するぐらいだったので、アイデンティティを探してたっていうのもあります。田んぼやってみたり、大学に行ってみて昔の伝統的なものが好きだと気付き、自分にできて地域の役に立てることはないかなと思って葛原さんのところに相談に行きました。

——相談されたんですね

妙涼　はい。「なんか竹って使えないですか」って聞いたら、「こういうの、もうやる人がいなくなったのがあるぞ」って竹皮円座の存在を教えてくれて。

——相談されてから何年経ってるんですか？

妙涼　6年前ぐらいに相談に来て貴重な円座も解かせてくれて、どうやって編んでるんだろうって見てたら楽しくなってきて。先生が欲しかったんですけど、もうそれは途絶えてしまったことだから解きながら、こういうことに気をつけて編んでたのかな、とか考えながらやっていたら、どんどん楽しくなっていきました。

　たまたま岩首に竹皮の草履を作るお婆さんがいると分かって、竹皮の拾い方とか時期とか処理の仕方も聞いて、道具は葛原さんや小木の数馬さんに作ってもらったりして、竹皮の円座と草履を作るようになったんですよ。最初は全然プライドも強い意志もなくて、自分にできることなんだろうっていうのと、たまたま教えてもらったものが性に合ってた。やっていくうちに本とかを読んで、昔は佐渡は竹が産業だったと知ったんです。ここ数年、竹林はジャングル状態で竹皮を拾うのも容易ではありません。最近は竹の問題で大停電があったりして、もっと竹人口を増やしたいなって思います。

——世界的に野草が流行ってるようですが、佐渡に野草研究家がいらっしゃった。何年ぐらい前から研究を？

はるみ　始めたのは12、3年ぐらい前ですね。私は山奥で育ったんですが、畑もやっていて沢山の植物があって。佐渡には熊がいないので3歳ぐらいの時から山に入っちゃって、山と共に育ってきたんです。でもこの草や植物のことを誰も教えてくれる人がいなくて。田んぼや畑をやっているのに野草の知識知ってる人が少ない。

　大きくなって結婚して妊娠して帰ってきた時に肌荒れがひどくなって、治す病院が佐渡にはなくて子供がいて病院に行くのは大変なので。どうしようとなった時に薬草で治せばいいと思ったんです。そういう本が図書館にありまして、タダだし。郷土史の人がかろうじて生きていたのでその方に聞きに行って教えてもらったけど、方言と図鑑に載ってる植物が一致しなくて把握するのに時間がかかりました。

ゆかり　そうね、方言じゃないと通じないんだよね、地元の人が。

——どうなったのですか？

はるみ　自分の様子をSNSにあげてたんです。そしたらハーブ王子の山下智道さんが佐渡に何度か来てくれたり。全国からSNSでこれはこうだよなど届いた。ある程度知識を得た上で、次はそれを使って生活した人の証言を知りたくなって老人ホームにアルバイトに行ったんです。そしたら方言と植物が一致してようやく話を聞くことができました。

　でも彼らは植物を使うことを全然誇りに思ってなくて、草を食べるのは幼少期のひもじさで恥ずかしいと教えてくれなかったんですが、教えてくれる人もいました。とにかくお年寄りの話を聞く事を続けました。ほとんど食べられるものしかないっていう言い方があります。山に7種、海に7種だけ食べられないものがある。あとは全部大丈夫だよってお爺ちゃんが言うんです。全部タダで食べられるから何も心配しなくていいよって。食費の心配とか医療費の心配とか。

井上妙涼

菊池はるみ

——失敗したこととかないですか

家族のご飯に入れても食べてもらえないことが多いので、そういうのが失敗かな。うちの家族は普通のものを食べさせてくれって言うんです。体にいいとかじゃなくて家族はジャンクフードがすごい好きなの。インスタント食とか加工法がしっかりしていて出所がわかっているもの。例えば防腐剤がきちんと入ってるとかが好きなんです。私は違うんですけどね。だから気づかれないように食事に野草を使ってるんです。野草は自然界から私たちへのプレゼントなんですよ。不思議な話ですが前世からのプレゼントだと思ってるんです。

——家族にも食べていただきたいんですね

野草の本とか見ると「枯れるように、人間らしく、自然と同じように枯れるようになくなっていく」と書いてあって憧れるんです。そうなってほしいから、丈夫になってほしいから家族にも出していくんですけどね。息子は野草自体を入れると気づくので、煮込んで出汁にするっていう方法を見つけたんですよ。ヤブニッケイっていう足腰が丈夫になる木の葉があって出汁を取ってちょっとスープにしたら「なにこれ、めっちゃうめぇ」とか言っておかわりする。私は自然界からの贈り物をどうしても料理に入れたい。どうしても入れたいんです。なんでだろう。

妙涼　山へ行った時のはるみさんは本当に素早い。崖でもさっと取りに行くから「はるみさん？あ、いない！」って感じです。

——妙涼さんの伝統を繋ぐ仕事を見てどう思われますか

はるみ　やらされてるなと思いますね。

ゆかり　**ああ、それはすごい感じる。**

はるみ　だって繋いでいかないと。ここまでの技術にするのに何百年もかかってるの。

——ゆかりさんの仕事はどうですか、子供の頃から見ていて。

妙涼　昔からずっと変わらないっていうか、多分子供の頃からこうなんだろうなって思う無邪気さがあって。その無邪気さの「鬼好き！じゃあ鬼で使うわらじ作ろう」とか、「鬼の面を彫ろう」とか。「仲間を次につなげよう」とかいいなって思います。祭りで履くわらじはお母さんじゃないと作れないなって思う。

ゆかり　自分が履いてるから。

はるみ　それはすごいと思う。

——野草担っているはるみさんの仕事はどうですか？

ゆかり　適わない。本当に何もかも知識もそうだし面白さも。ああいう知識を知るとじゃあ今日の料理に野草を入れてみようと思うもん。

はるみ　それ佐渡だからすごいのかも。

妙涼　そうだよね。同じ佐渡でもうちの周りには土が少ないし、車が多いから食べられないもん。野草が身近にある土地にいるっていうのが羨ましいですね。

はるみ　今これが美味しそうだからこれを使った夕飯、庭を見て夕飯を考えるみたいな。どうごまかそうかっていう…。

——ごまかそうって言葉使って笑わせてくれましたけど、知恵ですよね。

ゆかり　そう、知恵だよ

はるみ　もう失敗のつみ重ねですよ。何百年も失敗した結果、ここにいるのに。

——佐渡の魅力は何ですか？

はるみ　植物が豊かです。

ゆかり　今の佐渡が好き。

妙涼　今の佐渡にはギリギリだけど、人や文化がたくさん残ってるっていうのがすごいと思う。それが魅力。だからこそ今皆んなでつながないといけない。

ゆかり　自負してることがあってこの3人は食い止めてるっていうか繋ぎ止めてるんですよ。野草の知恵とか芸能や工芸品とか。私は鬼の面も作ってて、その師匠は昨年亡くなってしまって、竹皮のお婆ちゃんも東京行っちゃたりですが、今この3人は無くなる前にキャッチっていうか。ギリギリのところなんですけどつなぎ止めてる。止めたい？こんな言い方すると安っぽいんですけど、ほんと佐渡は宝の島ですごいんですよ。

妙涼　私たちもできる限りはやってるんですが、多分私たちだけじゃ全部賄いきれないぐらい佐渡にはいろんな宝があって。もう多分なくなっちゃう。円座みたいに。ちょっと遅かったなっていうものもあるので、今なんとか繋いでいかないとまずいなぁと思ってます

大倉正之助さんの言う一人一役。「野草」とか「竹皮」とか「藁」とかそんな感じでね、「おけさ笠」「菅笠（すげかさ）」とか、いろんな人でつなぎたいよね。

はるみ　それはちょっと広げていきたいよね。こんなにあるんだもん。

ゆかり　すごい島なんですよ。実は祭りなんて面倒くさいんですよ。本当に大変なんですよ。仕事しながら1ヶ月夜みんな集まって稽古して、たった1日の祭りのために時間を割いて道具を揃えて整えて。都会の祭りと違って神社の氏子の一軒一軒のためにやってるような祭りだから本当によく続けてるなぁっていうね。それがやっぱ佐渡すごいと思う。

——ありがとうございます。佐渡すごいで終わります。

2026年2月　佐渡大崎学舎にて

佐渡の民俗探究①

しめ縄づくり

令和8年1月上旬加茂湖に面した倉庫で、能楽師大倉正之助さんが声を掛けて集まった人達と共に注連縄を作りました。

初日は講師の徳田勝幸さんから早速基本の縄ないの手ほどき。初心者からは、「難しいけど夢中になれると」藁を手に一生懸命よっていました。

2日目は注連縄作り。目的の注連縄の長さは7メートルとし、1本の縄の太さは直径3センチ程にして3本作り、この3本をより合わせる作業。参加者が輪になり「心併せてひーふーみー」と威勢のよい発声。その中、より手の3人が藁を強く巻いていきます。

参加者達からは、「注連縄作りを通じて同じ気持ちを持つ人達と知り合え、沢山話しが出来て良かった。」またある男性からは、「集落にある神社の注連縄が古くなったので、ここで出来た注連縄を頂けないかと思って参加したが、注連縄は集落の人達と一緒になって作りたいと改めて思った。」との声が有りました。

参加者の最終日までの延べ人数は40名近くとなり、結果8本の注連縄が完成しました。

令和8年3月　宮下幸道

1.「飛天双〇能しめ縄作り」特設会場　2. 齋藤真一郎さんや農家さんたちより稲藁は切断せずに大量にご用意いただき、作業をする倉庫は堂谷剛氏に快く受け入れていただき実現することができた　3. 自由参加で集まった佐渡の皆さん　4. 初めは細い縄づくりから　5. 大きめの注連縄（しめ縄）が出来上がる（右下・宮下幸道さん）

参加された皆さん：井上ゆかり、菊池はるみ、井上妙涼、岡部健太郎、新保真子、益田純、小岩井麻弥、小岩井重人、小岩井樂音、小岩井麻杜、松嵜美保、松嵜星叡、松嵜永真、今泉幸子、今泉孝文、今泉元治、渡辺信弘、渡辺由未、大上紀子、山城利恵、三島明香、三島穂風、小森美紗、三島宏之、本間和幸、本間史華、カルタス・エンヒク・疋嶋フラガ、ブラック・ジャスミン、山本由果、大桃園子、長谷川浩章、三島天瑠、山本喜助、松平康太、吉川貴子、神村幸治、川上友一、村田慶子、村田明哲（順不同）

協力：株式会社堂谷組　有限会社齋藤農園

左から三浦百合子さん、堂谷里見さん、穂鷹多津さん

佐渡の民俗探究②

「しんこ餅」「やせうま」

島にて目を引くなんとも愛らしい「しんこ餅」。米粉を蒸し作る佐渡の伝統菓子だ。お釈迦様の日や祝いの日に作られたので、鯛や椿などやめでたい祝形が多い。つるつるで生地離れのいい椿の生葉の上に添えて出されていたという。型を作る職人を探してみたがお会いできなかった。

特徴的な名の菓子「やせうま（やせごま）」。筒状にこしらえた生地を金太郎飴のよう切ってみると見事な柄が現れる。用途はお供えや無病を願って作られる。

伝統菓子の素朴な絵柄と存在の華やかさに心あらわれる気持ちになった。実際に作っている間の女性たちは少女のように歓談している。こうして長い時を超えて佐渡の地で作られていた事が思い浮かぶ。

1. 菓子づくり時間は自然と会話が弾む　2. だんご粉を使って中にあんこを入れ込んだ「しんこ餅」を作る。今回はお好みによってお砂糖はなし　3. 型より外してみたら華やかな椿が現れた　4. 蒸す時間を待つのも楽しい　5.「やせうま」の生地を練って筒状にしていく　6. 筒状の生地を伸ばしてゆくと柄が現れた　7. 鯛、椿、うさぎ、カブの「しんこ餅」とチューリップ柄などの「やせうま」。可愛らしい出来上がりに歓声が上がる

大椋神社（赤泊）組立て舞台

柱材であろう木が見えているが痛みが気になる

境内の風景のひとつになっている瓦屋根の古屋

宝物の前にて地元の皆さまと記念写真

建築史の西和夫著「祝祭の仮説舞台・神楽と能の組立て劇場」（1997年出版）。気になる題なので広げて目次を探すと「佐渡」とある。慌ててその頁を開くと、西和夫先生は1997年当時の佐渡にて現存の組立て舞台の記録をなさっていた。すぐさま近江幸次さんにこの事を説明して、私たちは西先生が佐渡で歩んだ30年前の道のりを巡る事にした。

赤泊にある大椋神社。細い階段を登っていくと大きくて立派なカヤの樹が立っている。（佐渡市指定天然記念物）その横に瓦を施した細長い屋根の小屋があった。横壁は解放されているので中身が材木である事が見えた。西先生の記録によると明治期の材ではないかとある。

総代に連絡がとれて地域の皆さんと面会ができた。どなたもこの組立てした状態を見た事がない。地元のご年配からの情報も少し集まった。まるで過去から現代の人へのギフトのようだ。集まってくださった皆さんの温かな笑顔が忘れられない日となった。さあ、令和8年にこの材を使って組み立てる事ができるのだろうか。次回に続報を記す。

2026年3月

「耕す、紡ぐ、打つ、といった人間文化を醸す」

一般財団法人令和文化蔵

私たちの現在は未来にとってどういう時代なのでしょう

世界各地には伝承されてきた貴重な伝統文化・生活文化があります。それは地球上で長く繰り広げられてきた自然の恵みと人間の知恵と叡知の積み重ねた調和の姿です。

近代化が加速した約200年においては、日本でも古来からの文化継承は危うくなってきました。人々の暮らしは急速に変化し、文化は経済の後回しにされる状況です。これは深刻に捉える課題ではないでしょうか。このままでは本質を避けて根っこのない世の中を次の世代に引き渡すことになります。

当財団は懐古主義ではなく、伝統文化は革新の継続と捉え、人間の根本的価値だと重く受け止め、社会において何故文化が大切なのか、何故継承しなければならないのかを社会に問います。

後世の未来人に「令和時代に令和文化として再び文化が華開した」と言ってもらえる、真の日本文化の蘇りを皆さまと共に探究心溢れる喜びの気持ちで関わり、未来へ確実なる足跡を残してゆく所存です。

3つの事業

〈教育事業〉　〈調査復元事業〉　〈飛天双〇能事業〉

一般財団法人令和文化蔵
General Oncorporated Foundations　REIWABUNKAGURA

京都本部　京都市左京区南禅寺北ノ坊町
葉山事務局　神奈川県三浦郡葉山町
お問い合わせ　info@reiwabunkagura.org
電話 046-594-5097

飛天双〇能実行委員　info@hitenfutawanoh.jp

飛天双〇能　蔵守の会のみなさま

「奉賛会」から「蔵守の会」へ名称を変更させていただきました。
第5回飛天双〇能に向けて、引き続きご支援をよろしくお願い申し上げます

〔第一期〕
石原貫也
柳井正司
濱中月村
濱中治代
塚田了
三上祥惠
新井達夫
佐々木美恵子
大崎祥子
岡屋千枝
大谷育男
大谷弘美
中川宣夫
山坂哲郎
清水眞子
吉田真子
村岡英恵
村岡敬八朗
村田典昭
村田正美
金久保とも子
山部絹子
山部直
植松藤盛
李　隆吉
武藤浩司
中野　誠
出口　光
久保比登美
細山力生
吉田尚之
多田圭一
西村　凌
ホリトモヤ
東野りつ子
河原裕子
安井喜代美
萬屋仁兵衛
市川千里
玉井妙昌
畔柳謙一
荒木孝文
角田秀行
勝井まり
高相美穂
宮崎富恵
松島清照
箕輪朋子
松尾典子
椎名アニカ
小笹康史
染谷ひかる
谷口恵津子
辻中　公
兼田喜代
中澤順子
宮澤伸幸
高野利明
小西恵子
小川圭子
伊藤雅人
由結あゆ美
稲井英人
北方喜旺丈
北方邁羽
小川　洋
海上宗楽
伊藤時男
金子　務
西口久美子
尾崎恵子
森田通夫
田中教江
齋藤敬一
平田　誠

〔第二期〕
中川圭子
中西洋彰
児玉　博
麻生未央
溝手啓子
和賀　武
松本ゆかり
鈴木　匠
岩月淳
下井戸ゆり
堀江耕太
森　淑子
六本木二三子
伊庭貞一
新子千晴
河合光政
田中太郎
平井敏子
萩原義昭
高橋秀華
宗像　剛
宗像智加枝
奥田浩之
西田晃奈
斉藤敏博
野田なおや
村橋孝嶺
渡邊宏史
植松藤盛
濱中月村
濱中治代
海上宗楽
伊藤時男
細山力生
粕谷泰造
淡野乃祐
渡邊宏史
絹谷真人
冨樫　悟
藤中啓太
林　烈也
未成優一
安部春輝
柴田良介
丸茂隆章
藤原亜紀
上田啓通
田中芳幸
小塩　賢
池田佳代
宮田和彦
齊藤正二郎

〔第三期〕
きどりょうた
阿部ひとみ
伊藤泰子
清水千代子
殿元健照
山際ちをえ
国領満男
飯田容子
栗原みゆき
石井千尋
住谷久実
金本京平
峯山政宏
金久保友子
平松みよ子
徳田友美（龍太夫）
中澤順子
田中芳幸
出口　光

〔第四期〕
下井戸ゆり
中澤順子

〔特別会員〕
大橋武夫

令和八年3月30日現在

飛天双〇能と共に12年を歩いてくださる賛同者を募集します。

問い合わせ先　info@hitenfutawanoh.jp

掛軸・軸装・額装・パネル・巻物・貸額

伊勢神宮・日光東照宮御用達

株式会社 三重軸装

アートギャラリー 伊勢象宮
〔貸ギャラリー〕

〒516-0028 三重県伊勢市中村町607-28　TEL&FAX：0596-27-2292　https://miejikusou.jp

歴史と伝統を、ブランドTLDで未来へつなぐ

［ブランドTLDとは?］

mybrand.gmo

ホスト名　ブランドTLD

私たちは、企業や組織が独自に所有できる
インターネットの住所(ブランドドメイン)をご提供しています。
例).canon .toyota .hitachi

飛天双〇能のご奉納を通じて、
日本の豊かな物づくりの文化と伝統が継承されることを祈念しております。

すべての人にインターネット
GMO REGISTRY

問い合わせ先 support@gmoregistry.com

MAKE JAPAN GREAT BITCOIN NATION AGAIN

伝統と革新の融合

ANAP Holdingsはビットコインカンパニーとして佐渡島の発展を応援します

X

ANAP HOLDINGS

https://www.anap.co.jp/anap-holdings/

株式会社レビアル

株式会社 新潟クボタ

〒950-8577
新潟市中央区鳥屋野331番地
TEL:025-283-0111

株式会社 興和

代表取締役社長　齋藤　浩之

佐渡支店長　笹　雅人

3分野6事業とSDGsを通じて社会に貢献しています。

- ▶ 斜面防災事業
- ▶ 消・融雪事業
- ▶ 耐震化・老朽化対策事業
- ▶ 再生可能エネルギー事業
- ▶ 環境保全事業
- ▶ インフラ整備事業

本　社　／　〒950-8565　新潟市中央区新港町6番地1　TEL：025-281-8811

支　店　／　東北(仙台)・北陸(金沢)・新潟・中越(長岡)・上越・佐渡・テルースラボ

営業所　／　札幌・青森・山形・長野・富山・阿賀野・魚沼・十日町・糸魚川・東京

ホームページ　／　https://www.kowa-net.co.jp

▸興和会社HP

▸興和 Instagram

HOTELLI aalto

ホテリ・アアルト株式会社

NDT 日本電動式遊技機特許株式会社

Studio BORBOLETTA

株式会社ボルボレッタ

伊勢和紙

太閤餅

若き日の豊臣秀吉が伊勢神宮に参拝した際に食した焼き餅を「美味也」と激賞しました。彼が後に「太閤」となり天下人にのぼりつめるまでに「出世」したことにあやかって、「太閤出世餅」と呼ばれるようになりました。以来、永年にわたって縁起餅として親しまれ続けております。

ホテル　6月の森

都内の喧騒から離れ唐沢の自然に包まれたホテル
夕食はフレンチコース、朝食は和食御膳の和洋折衷を楽しめます

〒327-0801 栃木県佐野市富士町963番地
info@6gatsunomori.com

中野酢

お酢は生きている
江戸時代からの伝統製法
京都中野酢

新潟県建設業協会佐渡支部

JA 佐渡

朱鷺と共生する島、佐渡。

清冽なる水と豊穣の大地。その営みの中に息づく農村景観、

受け継がれてきた文化と伝統芸能。

世界農業遺産（GIAHS）に認定された人と自然が響き合うこの島の価値を、

誇りと責任をもって守り育み、島民と共に確かな歩みで

次代へ継承してまいります。

信頼と技術で郷土づくりに貢献する

DOTANI-GUMI

株式会社　堂　谷　組

〒952-0006新潟県佐渡市春日1009-1
TEL(0259)27-3205
FAX(0259)23-2057

佐渡島内企業協賛

Fruits & Cafe
SAITO

佐渡と共に生きる

齋藤農園
SAITO NOUEN

住所　佐渡市新穂青木 667-1
電話　0259-67-7088

大和産業株式会社

有限会社菊池組

佐っとび餃子

名物料理 ブリカツ

佐渡島は四季を通じて様々な魚介類が水揚げされます。

島に感謝し、お客様に感動を

佐渡島民が慣れ親しんだトビウオのすり身をより美味しく、
楽しく召し上がっていただける「佐っとび」料理をお伝えします

キッチン　よろこんで

住所　新潟県佐渡市原黒 109
営業時間　11:00-21:00（LO 20:30）
定休日　無休（月 2 回店休あり）
電話番号　0259-67-7726
両津港から車で 3 分　駐車場あり

佐渡島内企業協賛

朱鷺さなえ会

リニューアル リフォーム 請負・総合内装工事請負・ビルメンテナンス

■特定建設業新潟県知事許可（特−4）第11870
■ビルメンテナンス業新潟県知事登録（2008）第113003

斎商

斎藤商事株式会社

本　社　〒952-0021 新潟県佐渡市秋津87番地
TEL（0259）27−6177㈹
FAX（0259）27−6004

イケベジ

農から社会へ
www.ikevege.com

佐渡商工会連絡協議会

長畝生産組合

スーパーつるや

柿酢合同会社

佐渡塾
SADO JUKU

グリーンファーム（三浦電気）

新潟産業株式会社

LaClear

有限会社山本組　ラクリア

佐渡ホンダ販売株式会社

ご奉納会
大山祇神社
歌代神社
加茂神社能舞台
大膳神社能舞台
越敷神社
小泊白山神社能舞台
大崎白山神社能舞台
多門寺
佐渡諏訪神社能舞台（潟端）
大椋神社組立て舞台
総源寺

佐渡実行委員会
齋藤真一郎
近江幸次
堂谷 剛
堂谷里美
本間和幸
日下勝啓
粟生田忠雄
佐藤達也
井上ゆかり
井上妙涼

協力
一般社団法人佐渡観光交流機構
佐渡塾
東京新潟県人会
株式会社イワイ工務店
佐渡汽船株式会社
一般社団法人茶道裏千家淡交会
佐渡牡蠣太平丸
佐々木農園
株式会社ブルーゲートハウス
株式会社ライズアップ
佐渡市立両津吉井小学校
益田 純
坂下善英
長嶋俊介

別火協力
弘仁寺
いさりびの宿 道遊
宮下幸道
山形正哉

料理
奥薗良輔
川口真澄

復元協力
株式会社北織
日本寺
金刺広子
関駒三郎
吉田正子

展示
大月光勲
大崎哲生
大橋武夫
大森芳紀

直会
兵庫八重子
兵庫勝
菊池はるみ
金子さやか

ケータリング
鈴木ますみ
奥薗さよ子

佐渡自然農作物
有限会社齋藤農園
矢田徹夫
長江倶楽部

公式 WEB
GMO ドメインレジストリ株式会社

動画制作
藤本剛史
小林武尊

動画撮影
寺崎寛之
和田大作
コイデセイヤ
Studio Mama-Qwanka

写真撮影
増井貴光
その江
松本和子

運営協力
中澤順子
谷川涼子
今川未由希
鹿倉菜七海
畔柳謙一
小椋雄大
濵田さやか
岸順子
岡部健太郎
嘉向徹
椛島将太
野田久美子
湯沢龍也

運営
株式会社ミックス

後援
文化庁
環境庁関東地方環境事務所
新潟県
佐渡市
佐渡市教育委員会

製作総指揮
大倉正之助

企画
川瀬美香

制作
至田祐己

主催
一般財団法人令和文化蔵
飛天双〇能事業
令和文化蔵葉山事務局

冊子
デザイン
髙橋克治（eats & crafts）

編集、写真
ART TRUE FILM

製作
一般財団法人令和文化蔵
飛天双〇能事業

〒 240-0113
神奈川県三浦郡葉山町長柄 492-1
葉山事務局

電話　046-894-5097
問合わせ　info@hitenfutawanoh.jp

編集後記
佐渡は佐渡だった。だけど佐渡はこれからがはじまり、はじまり。

次回開催地発表
令和9年5月8日　飛天双〇能　福井県小浜市にて開催
ただ見ているだけで人生を終わらせないために

一般財団法人 令和文化蔵
YOUTUBE チャンネル
ご登録をお願いします。

金鶴 加藤酒造店
創業 大正四年
全量佐渡産米使用蔵
有限会社 加藤酒造店
本　店　佐渡市沢根炭屋町50
製造場　佐渡市金井新保乙1120-2

佐渡アグリカルチャーシップ
有限会社

伊藤建設株式会社

株式会社 JA ファーム佐渡

特定建設業
一級建築士事務所
有限会社 伊勢工務店
〒952-0013　新潟県佐渡市両津福浦2-242-40
TEL（0259）27－4805㈹
FAX（0259）27－4803
URL　http://www.ise-arcpro.com
E－mail　info@ise-arcpro.com

株式会社高橋産業

中野建設工業株式会社

有限会社セブン・システム

NPO 法人食と夕日の佐渡島

JA 佐渡自然栽培研究会